

縁翁のふとみまかりし師走かな 東北大学名誉教授 故藤原彰夫先生を偲んで



東北大学名誉教授・藤原彰夫先生は2002年12月28日、94歳のご高齢をもって逝去されました。ご生前の当工業会に対しての多大のご指導、ご貢献に感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

2003年1月25日、学士会館で『告別の会』が開催されました。全国各地と海外から約200名におよぶ産官学の土壌肥料関係者が集まり、緑の花で飾られた先生のご遺影に献花をしてお別れをしました。

ご遺族のご挨拶、先生のご経歴・ご功績の紹介、献杯につづき東北大藤原研究室出身で同大農学部教授の三枝正彦先生(日本土壌肥料学会会長)がメイン

スピーチ。つづいて、東京大学名誉教授の熊沢喜久雄先生をはじめ産官学の代表8名のかたがたからお話がありました。

工業会と藤原先生の関係は非常に深く、長年にわたりご指導をいただきました。昭和31年には、農林省の協力を得て、工業会が各界の権威者に委嘱して新しい時代の新しい観点から石灰窒素の総合研究をおこなうことになりましたが、藤原先生は研究者のリーダーとして5か年にわたり石灰窒素の基礎的な解明と利用法などの開発に取り組まれました。

『石灰窒素だより』にも、たびたび寄稿されました。

No.127(1992年)には「古くて新しい石灰窒素」と題して、生理活性物質のポリアミンはシアナミドと土壌中の有機物との反応により生成される可能性が高いとの説を出されるとともに、限らない可能性をもつ石灰窒素で村おこしをする“石灰窒素村”ができて「もよい気がする」とまで述べられています。

No136(2001年)には『石灰窒素生誕100年』の記念号に「石灰窒素の過去・現在・未来」と題して、21世紀の石灰窒素は肥料・農薬用としてだけでなく、医療、栄養食品分野への活用の期待を寄せられました。

また、植物のホルモンのような作用や地球環境浄化への可能性についても着目されていました。とくに、毎年世界中で400万人を越す尊い人命が奪われているマラリアの撲滅に、石灰窒素によるハマダラカの幼虫(ボウフラ)の防除を提案されています。

2001年11月8日におこなわれた『石灰窒素生誕100年記念論叢会』にはご祝辞と乾杯の音頭をとっていただきました。

最後に、94歳のご高齢で石灰窒素の未来について、熱っぽく夢を語ってくださった藤原先生の面影を偲びつつご冥福をお祈りいたします。 【日本石灰窒素工業会・平沢陽一】